

《公開講演会記録》

故郷チベットに、 希望と医療を届けたい

武蔵台病院長 西蔵 ツワン



西蔵ツワンと申します。私はチベット人ですが、日本国籍を取りまして、日本の苗字を、漢字でチベットを意味する西蔵（にしくら）とし、50数年間、日本でいろいろな活動をしてきました。今日はチベットの苦悩とチベット民族の粘り、あるいは希望ということを少し話したいと思っています。私の人生、あるいは生い立ちを通してお話させていただきます。その中でチベットの現状と問題を少しでもみなさんに分かっていただければと思っています。

インドに亡命

私は1952年にチベットの第二の都

市といわれるシガツェで生まれました。首都ラサは中央にあります。シガツェは南部、昔から商業の町で、インド、ネパールに接していて、いろいろな商売の拠点となっています。

私の父は、中国がチベットに侵攻する前には、チベット政府のいわゆる役人で、通商の仕事をしておりました。みなさんご存知かもしれませんが、チベットとインド、ネパールの間にはヒマラヤを越える「塩の道」というのがあります。塩の道は何本かあって、それを統括する仕事でした。チベット本土からは岩塩を、昔のことです。大キヤラバンを組んでインド、ネパールに運ぶ、インド、ネパールからは米をチベットに持っていく、そ

ういう仕事を統括する仕事で、その拠点がシガツェでした。

仕事の関係で父はしょっちゅうインドやネパールに行っておりまして、ほとんど家には帰ってきません。私と母と妹がシガツェに居をかまえて生活をしておりました。

ご存知と思いますが、1959年に中国がチベットに侵攻して、ダライ・ラマ法王はじめ、約6万人のチベット人がヒマラヤを越えてインドに亡命するということになりました。私がインドに亡命したのは62年です。法王が亡命されて3年後にインドに亡命しました。約3年間のギャップがありました。法王がインドに亡命された時、父は丁度インドのダー



チベット難民キャンプ ダージリン（インド）

ジリンで仕事をしていまして、それで父は戻れなくなってしまったのです。そのため約3年間、私たち家族は父と離れ離れになって暮していました。

その3年間、私はシガツェで中国の教育を受けました。内容については、2008年の「文藝春秋」に手記を出していますので、それを読んでいただければ、当時の状況が分かるかもしれません……。父は62年に突然チベットに帰ってきました。そして私と母と妹を連れて、ヒマ

ラヤを越え、インドに亡命しました。

63年にインドに到着したときは、まずダージリンの難民キャンプに収容されました。私は10歳くらいだったと思います。私がここに収容されたときには、すでに多くのチベット難民が収容されていました。大人はチベットの絨毯や民芸品をつくっては、海外に売って生活をしていました。一方、子どもたちは勉強しました。チベット亡命政府は、59年に法王がインドに亡命されたとき、大きな柱を立てたんです。それは何かというと教育です。

インドの当時のネルー首相からダライ・ラマ法王が助言されたという話もありましたが、とにかく、これからのチベットの若者たちには近代的教育を受けさせることがとても大事だ、と。難民キャンプに来たときには、大人たちはたいへんな生活をしていました。たとえば、一つのバラックのような家の六畳一間ほどのところに2家族住んでいて、しかも2つの部屋に電球が1個、そういう生活でした。しかし、子どもたちはのびのびと教育を受けられるような環境をつくってありました。それは教育が大事というチベット亡命政府の方針によるものでした。このダージリンという町はおもしろい町で、地理的にはチベット、ブータン、

ネパールに近い町で、今は紅茶で有名な町ですが、歴史的には、昔、チベットが鎖国の時代に、数人なんです。日本人を含めて外国人の方たちが、ここからチベット本土に潜入された歴史もあります。当時はみなさん、ダージリンを拠点に、ここで情報を得て、チベットに入られたという記録がたくさんあります。日本人では明治、大正の時代に河口慧海先生もダージリンで情報を仕入れ、ダージリン経由でネパール、ネパールを通過してチベットに入りました。青木文教先生もそのよ



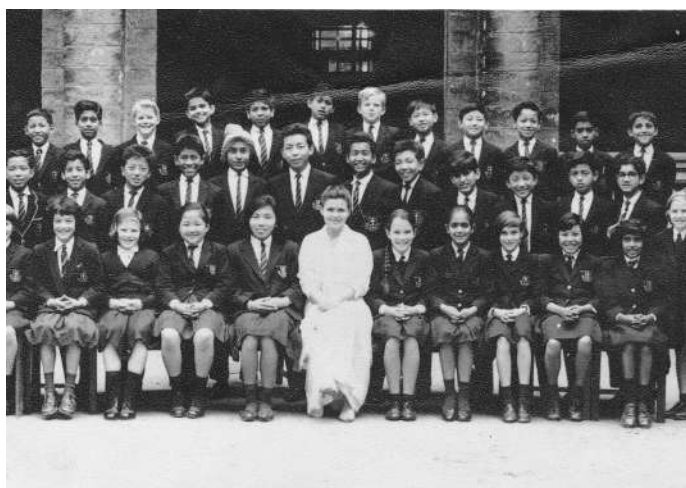
1967年 ダライ・ラマとチベット難民留学生
後列右から2人目がツワンさん

うな形をとられました。そういう意味でも面白い町です。

昔、英国が統治していたときにはダージリンは避暑地だったんです。今もその面影があります。同時に、ここはインドでも有数の学園都市でもあります。英国式の寄宿舎のある学校が3つ4つありました。ついこの間ブータンの国王が日本に見えましたが、今の国王はどこで勉強をされたかは分かりませんが、あの人のお父さんはたしかダージリンで勉強されていたと思います。

私が難民キャンプにいたのは3カ月間でした。難民キャンプの中から、どういう選抜をしたのかは分かりませんが、私を含め5人がダージリンの英国の学校に移ることになりました。もちろん亡命政府がお金を出したとは思えませんが、いろいろなところからの援助で、その学校に入る事ができました。

その学校はいわゆる昔の英国式の学校でした。寄宿舎での生活はどちらかというとカトリック的な学校で、規則がとても厳しいところでした。先生方がいつも私たちに言ったことは、「君たちは特別な人間なんだ。将来国を背負う人間たちだ。すべてのことにおいて、テーブルマナーからいろいろな勉強まで、すべてを覚えなく



英国学校（ダージリン）中央白服の先生の向って左後ろがツワンさん

てはいけない」ということでした。

その英国の学校では食堂に入るときは、必ずネクタイをしなくてはいけない。食事をするときも、風紀係の先生たちがまわってマナーを教えました。私はチベットのから亡命して、半年も経たないところで、突然英国の学校に入れられたわけで、とてもショックを受けて、どう対応したらいいのか分からない状況でした。で、私たちの同級生のまわりを見ますと、けっ

こうその頃も、ブータンの貴族、官僚の子どもたちもたくさんいましたし、ネパールからの学生もたくさん、近代的な勉強をしに来ていました。それから当時、珍しいと思うのですが、タイからの留学生もたくさん来ていました。タイには英国式の学校があまりなかったようで、このインドのダージリンの学校に留学に来たのです。もちろんインド国内の裕福な子どもたちもいました。

その中で、私たちだけが難民の子どもということでも、もちろん教育は平等に受けることはできたのですが、気持ち的には何となく落ち込んでいたような時期でありました。英語も分からないわけですから、学校で特別な教室を編成して、英語のレッスンを受けたという時期もありました。この学校は歴史的にもチベットが独立国家の時代は、かなりチベットの貴族の子どもたちもこの学校にいまして、そういう流れがずっとありました。今のチベット亡命政府の中枢にいる私たちの年代の人たちは、だいたいダージリンの英国の学校を卒業しています。

日本へ留学

何が何だか分からないうちに約3年間

英国の学校にいまして、それから近代的な教育のために日本へ、という話になりました。どういうふうに出発されたのかは分かりませんが、私を含めて5人が選ばれました。日本では国際政治学で有名なペマ・ギャルポさん、彼も5人の1人で日本に来ました。

後から話を聞きますと、どうも木村肥佐先生が日本政府に働きかけたようです。しかし日本政府はあまりいい反応はしなかったようで、木村先生は個人であちこちに、何とかチベットの難民の子どもたちを留学生として引き受けてくれなにかと動いたという話を聞いています。

木村肥佐先生という人は、日中戦争のときにモンゴルに行かれて、特務機関と表現していいのでしょうか、モンゴル語も勉強されて、どの時期なのかチベット本土にも入られたという記録もあるようです。木村先生が出された英語の本、『ジャパニーズ・エイジェント・イン・チベット』を読みますと、木村先生がチベットでどういう活動をされたかが書いてあります。

法王以下6万人のチベット人が亡命し、インドのダラムサラに建てた亡命政府はとにかく、子どもたちに近代教育を受けさせるという大きな柱がありました。10

歳、15歳といった子どもたちが大勢、政府などの援助でスイスに移住し、現在、スイスにはチベットの大きな組織があります。日本でも何とかならないかという話があり、それで木村先生が動きまして、今でも忘れませんが1965年12月、日本に来たわけです。

木村先生がアプローチされたのは、現在の埼玉医科大学の初代理事長、丸木清美先生でした。丸木先生は日本政府が援助しなければ、私が個人で援助するということが、第一陣として私たち5人が来日することができたのです。

私たちは日本をヨーロッパやアメリカのようなイメージで考えていました。ところが羽田に着いて、にぎやかな東京都内を通りぬけ、だんだん電灯もない山中に入っていくんですね。丸木先生の当時の拠点は、埼玉県の毛呂山町の毛呂病院で、当時は精神科で全国的に有名な病院でした。毛呂病院は埼玉医科大学の前身で、当時私たちは丸木先生のことを「院長先生、院長先生」と呼んでいました。毛呂山町というのは、当時、人口2万人に満たない田舎の町で、そういうところに私たちは着きました。よくいえば日本の昔のいい町、悪く言えば、ド田舎だった、そういう印象があります。

一番小さい子が10歳、あとは12、13歳でした。さて、この子たちをどう教育するか、どうしようかと考えたようです。

丸木先生は医者であると同時に県会議員でもあり、地元ではかなり力を持っている方でした。今では考えられないことですが、到着したのが12月、おそらく学校から言われたのかもしれませんが、とにかく4カ月間で、小学校の国語の教科書をマスターしなさいと言われました。翌年、4月から地元の中学校に入れるからということで、丸木先生の病院の若い先生や事務員の方たちみんなが協力して、ほぼ24時間の特訓でした。

職員の人たちも夜仕事が終わった後、自分の時間を割いて私たちの教育をする。丸木先生から病院の公舎を与えられ、今思えば長屋のような、昭和の初期みたいな家ですが、そこで私たちは暮らしました。職員の人がいっしょにいて、私たちを指導しました。非常にきめ細かい、ケアをしてくださいました。今、その職員は埼玉医科大学の常務になられています。それで私たちは地元の中学、高校を卒業しました。

丸木先生は、「将来のチベットをつくるために教育は必要だ。自分たちの好きな分野にいきなさい。支援はする」とい



民放テレビ出演 左から2人目がツワンさん

うことで、5人のうち、2人が医者になり、後は国際政治の専門家、ベマ・ギャルボさんともう一人が亜細亜大学へ。もう一人は日本体育大学に行き、卒業して柔道を勉強してインドに行き、ドライ・ラマ法王のSPとして、若い人たちに柔道を指導したり、またインド国内のインド軍の中にチベット部隊があるのですが、その部隊で柔道を担当しています。

5人はそれぞれの道を歩むことになった

のですが、当時、チベットの子どもたちというのは、珍しかったのでしょうか。中学、高校のころまでは、日曜祝日には私たちがの取材が多かったものです。テレビ、新聞、雑誌、あるいは映画のニュースにも。毛呂山町では有名人になりました。

当時、民放テレビで、チベット特集を組んでくれたり、黒柳徹子さん司会のテレビのクイズで、うしろの奥様たちに「この子たちはどこから来たでしょう?」というのもありました。記録は今でもたくさんあります。それが72年の日中国交回復以降は、ぱったりとなくなりました。マスメディアもチベットのことをやろうとすると、「いや中国が…」という状況がずっと続きました。

医師を選ぶ

私は、日本に来たとき、医者になろうとは思っていませんでした。マスメディアがあまりにも一人一人に「将来何になりたいか」と聞くものですから、医療の環境にいた私は「医者になりたい」と言ってしまう、それでそのまま医者になってしまったわけです。埼玉医科大学に入りまして、卒業して国家試験を受け、埼玉医科大学で10年間、研究させてもらいま

した。私の専門は、消化器と肝臓です。10年間、勉強し、論文もたくさん発表しました。

埼玉医科大学の10年間ではいろいろな経験をさせていただきましたが、自分はチベット人であり、最新教育を受けている者だというアイデンティティーがいつもどこかにありました。私は「チベット人で初めて医学博士をとった」とか、「チベット人で初めて発表した」ということが好きというか、どこかにその思いがあります。日本に住みながら、そういう思いをずっと抱えていました。海外で、たとえば香港とかインドとかアメリカなどよく論文を発表しましたが、私の英語の発音が、日本人の先生方とちょっと違うらしいのです。そこで、私は「実は日本人ではありません。チベット人です」と言うと、皆「えー!」と驚きます。私はこの「実は…」が、気分がいいのです。チベットのアイデンティティーというのが常に変わらずあるからでしょう。いつか中国の山西省の医師たちが埼玉医科大学に研修で来たことがあります。最初はチベット人だと言わないで、彼らを指導したのですが、懇親会のとき、私の西藏という苗字を見て、中国の先生たちが「西藏、これはチベットだ」という

ので、「私は実はチベット人です」というと、「えー!」とすごく驚くので、なぜですか? と聞くと、先生たちは「私たちが教わったチベットは未開国で、無学で、宗教ばかりだというイメージだ。まさかチベット人から最新技術を教わるとは思わなかった」と言うのです。気分は上々でした。

JICAの仕事で、ネパールに行ったとき、ネパールの要人から「あなたの英語はなぜか懐かしいね」と言われました。「私はチベット人で、昔、ダーズリンで英語を学んだ」というと、何とその方は学校の同級生でした。そういう縁もありました。常にチベット人を意識しながらやっております。武蔵台病院の院長として、自分からチベット人だとは言いませんが、患者さんたちが、「院長はツワンという名前だけど、昔の人は片仮名の名前も多いから、日本人なんだろうねえ」と話しているのを、ニコニコと聞いています。もっとも主な患者さんにはチベット人であることを話していますが。

北インドにチベットの亡命政府ができてから60年が経ちました。多くのチベット人が2世、3世の時代になっています。ある調査では、チベット難民の人たちはインドでかなりがんばっていて、世界の

難民の中でも優秀な難民といわれています。やはり教育に力を入れた結果なのではないかと思っています。

私は自分が受けた恩、多くの方たちと縁があって、受けた恩を、次の世代につなげようと思っています。日本では、チベットの問題に発言をしつつ、私たちを育ててくださった丸木先生の理念を何らかの形でつなげたいということで、丸木先生ほどの大きな事業はできませんが、真似ごとをしながら、インドから看護師をよび、育成をしています。インドで活躍しているチベット人の医師も多いし、私のように日本や台湾、ヨーロッパなど、海外にいる医師たちの組織をまとめて、いわゆるチベット医師会をつくって、インドにあるチベットの難民キャンプに行って、たとえばB型肝炎のワクチンをうつたり、また若い先生たちの研修などを日本で行っています。

自分の人生を振り返ってみますと、チベットは私を生んでくれた国、日本は育ててくれた国だと思っています。政治的な話になってしましますが、チベットの問題については、日本政府はもう少し、中国に対して毅然とした態度をとっていただければいいないつも思っています。チベット国内にいるチベット人も、国外

にいるチベット人も、究極には祖国がない限りは、放浪の民だと思っています。日本国籍をとり、安定した生活を送っていても、心にはいつもチベット問題があります。チベットが今のような状況だと非常に不安です。自分の戻る祖国はどこなのかと、自分に問いながら生きています。どこかでチベットの現状を話したい。そのために、自分の名前を「西藏」にし、願いを込めました。

今年5月に60歳になりますが、生きていく間にチベット本土に行ければいいなと、願うばかりです。

(1月13日・講演会)

講師略歴(にしくら ツワン)

- 1952年 西チベット・シガツェ生まれ
- 1962年 難民としてインドに亡命
- 1965年 民間のサポートで来日
- 1980年 埼玉医科大学卒
- 1981年 医師国家試験合格
- 1987年 日本国籍取得
- 埼玉医科大学病院勤務を経て現職
- チベット難民子供支援会「パサニア会」国際部代表